

地域スポーツの教材的価値

ー 練馬区キャッチバレーボールに着目して ー

田中 紗良

(学籍番号：17pe1087, 推薦教員：玉腰和典助教)

目的

今日、人々は近代スポーツだけではなく、地域スポーツやニュースポーツ、そしてレクリエーションスポーツなど様々なスポーツを楽しみ、生涯スポーツを実現している。生涯スポーツの実現をめざす学校体育においては、こうした多様なスポーツ素材を教材していき、学校卒業後のスポーツ活動に見通しをもたせていくことが求められている。

近年においては、2008年の学習指導要領改訂により、教材の提示方法が「バスケットボール」や「サッカー」といった種目名から、「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」といった型ベースとなり、ボール運動系の教材を教師が創造する範囲が拡大している(文科省, 2008)。したがって、カリキュラム上はボール運動系においても、地域スポーツを教材化できる可能性がある。

わが国では1964年東京オリンピックにおける女子バレーボールの活躍も契機となりながら、家庭婦人バレーボールが流行し、全国的な広がりを見せる(内海, 2001)。そして、それらは全国へ広がるとともに多様な地域バレーボールとして作りかえられ、発展されている。練馬区キャッチバレーボールはその1つであり、約50年の歴史をもち、現在、練馬区を代表する地域スポーツとなっている。

そこで、本研究は、生涯スポーツの実現に向けて、地域スポーツを学校体育へ導入していくために、練馬区キャッチバレーボールを事例として、地域バレーボールにはどのような教材的価値があるのかを解明することを目的とする。

対象と方法

研究の対象は、練馬区キャッチバレーボールであり、その魅力および児童期への適性を検討していく。

研究の方法は、インタビュー調査およびアンケ

ート調査である。具体的には以下の手順をとる。

2019年3月3日に開催される「第71回練馬区民体育大会キャッチバレーボール競技会小学生の部」(練馬区立光が丘体育館)にて、ゲームを観察するとともに、監督へのインタビュー調査を実施する。

2019年4月13日および6月9日に一般選手へのアンケート調査を実施した。なお、アンケートは33名(男性13名、女性20名)が回答した。

結果

①監督へのインタビュー調査から

小学生チームの監督3名へ練馬区キャッチバレーボールの魅力についてインタビューした結果、独自ルールであるボールをキャッチすることによる利点があげられた。

まず、ボールをキャッチすることで、ボールが止まる時間があり、考えることができる。そのことによってプレーに工夫が生まれる。また、ボールを3秒間保持できるため、状況を判断することができ、消極的であったり、苦手な子下手な子でも活躍する場面が増えたりするところが魅力であると述べていた。

また、監督は練馬区キャッチバレーボールとバレーボールのプレーの違いを「点」と「線」で表していた。練馬区キャッチバレーボールは、バレーボールのように反射的な「点」のようなプレーではなく、ボールを保持して考えることができるため1プレー1プレーが積み重なり、「線」のようになる。このように、プレーの意図がつながっていくことがおもしろさであると述べていた。

②選手へのアンケート調査から

一般選手へ練馬区キャッチバレーボール独自の魅力および練馬区キャッチバレーボールを児童期に実施する上での適性を質問した。結果、独自の魅力としては、みんながプレーできる(17名)、

予測不能なプレーがある（12名）、技術的な難しさがある（9名）、連携プレーが多い（9名）、ねらったサーブが打てる（8名）、強いアタックが打てる（6名）、アタックがたくさん打てる（4名）、ねらったアタックが打てる（3名）、ねらったところにトスがあげやすい（3名）が回答された。

また児童期への適性については、31名が適切である、1名が適切ではない、1名が無回答であった。ほとんどの選手が適切とあげている。適切ではないと回答した1名は膝への負担をあげている。適切であるとした理由は、身体機能の向上が12名と最も多く、その内、「捕る」「投げる」「跳ぶ」といった全身運動を実施することでバランス良く運動能力を育成することが多く（5名）あげられた。その他、チームワークを学べ、友達と交流ができる（6名）、ボール操作が習熟する（3名）、ボールに対する恐怖心が少なくなる（1名）、簡単な動作で激しすぎず、苦手な子でも参加しやすい（1名）といった回答がえられた。

考察

以上の調査結果をふまえ、地域スポーツである練馬区キャッチバレーボールの教材的価値を次ように整理することができる。

1点目は、「誰でもできるスポーツである」ということである。簡単な動作ができればプレーに参加することが可能である。練馬区キャッチバレーボールでは、キャッチして投げるといった一連の動作や球技の基本的な動作さえ出来れば、プレーに参加することができる。バレーボールとは違い、アタックの仕方、サーブの打ち方、トスのやり方が分からなくてもゲームに参加することができるのである。スパイクも両手で投げるため、片手ではじくよりもスピードやボールの回転数も少なく、恐怖感が軽減されている。瞬時のプレーではなく、ボール保持時間が設けられるため、ミスが少なくプレーが繋がりやすい。様々な点から、より参加しやすい競技である。すなわち、ほとんどの方が、経験したことがなくてもプレーをすることができる。ここが魅力である。技術がなくても基本ができれば大丈夫であるため、親しみやすく、挑戦しやすい。

2点目は「みんなが活躍できるスポーツである」ということである。練馬区キャッチバレーボールは役割が定められていない。通常のバレーボールでは、リベロやセッターと役割がある。しかし、

練馬区キャッチバレーボールには存在しない。まず、この利点としてはセッターがいなかったことにより、2アタックが可能である。前衛は3人の内、誰が攻撃してもよく、2本目で相手コートにアタックを打つことができるため、ディフェンスは返球後すぐにレシーブ体勢をつくる必要があり、ネット際の緊張感が高い。児童が行う際は、プレー中は常に気を張って集中しなければいけないと感じてもらいやすい。また、リベロというポジションがないため、全員がアタッカーであり、全員がレシーバーなのである。レシーブだけ行う選手はおらず、全員が全ポジションを行うことができることも練馬区キャッチバレーボールの魅力である。

先ほども述べたように、セッターやリベロ、アタッカーなどというポジションが存在しない。ローテーションを行うことで、みんながすべてのポジションを行う。また、役割が存在しないことにより、全員で攻撃をし、全員で守る。前衛は誰でも攻撃ができるため、ネット側のプレーに緊張感が高まり、レシーブ側も全員で守りに入る必要がある。よって、全員が動かないと成り立たないスポーツであり、みんなでプレーすることを味わえるため、みんなが活躍できるスポーツであるということである。

3点目は、「できる」が身近にあることである。上記で何度も述べてきたが、球技の基本動作だけで行うことができるスポーツである。運動が苦手な子どもも、活躍できる場が増加する。小学生がスポーツをする上で「できる」「できた」を身近に感じ取らせることは、スポーツを楽しむ上で1番大切なことである。小さな「できた」が積み重なり、次のステップへと繋がるのである。練馬区キャッチバレーボールだけでなく、様々なスポーツにこれから関わっていく上で「できた」を感じやすいということはとても重要になってくる。

以上のように、「誰でもできるスポーツである」「みんなが活躍できるスポーツである」「できるが身近にある」、この3点が練馬区キャッチバレーボールの価値だという結論がでた。今後も地域スポーツの魅力やその価値について検討していきたい。

主要引用文献

内海和雄（2001）「ママさんバレー」の実態と意義．一橋論叢，125（2）：115-131.
文部省（1949）学習指導要領小学校体育編（試案）.